

六葉会会報

vol.9



関東学院六浦中学校
関東学院六浦高等学校

同窓会



目次

街にいい人 会長 田野井 一雄	1
学校の近況 校長 永野 肇	2
退任にあたり 石田 昭義	4
村田先生の思い出 大井 人	6
学年クラス会だより「還暦記念三暉会」.....	9
福田淳恵先生を囲む会 語学部OB	10
思い出 板倉 由史子	12
安曇野通信 曲淵 憲介	14
全日本学生選手権2連覇世界に挑む卒業生 小菅 寧子	17
OB訪問 野沢博士・武 巖	18
1996年度 決算書	20
1997年度 予算書	21
訃報	22
ちょっとCOLUMN	23
編集後記・思い出の街角スナップ	24
1998年度 中学校・高等学校生徒募集要項	25



街に いい人



会長

田野井 一雄

永い歴史と伝統に培われた我らが母校、関東学院、六浦高等学校が本年第四五回二二三名の卒業生を輩出し、総数九、七七九名となり一万人にあと一步となり、母校も六葉会も増々発展の一途をたどっていることは喜びに耐えられません。しかしながら世の中は何が起きてもおかしくない殺伐とした先き行き不透明な時代背景にあると思います。

その要因は何か。私は戦後五十二年を経過した今、先人・先達の血と汗のにじむような大きなご努力により、よく働き子供を育て、教育し、

世界でも有数な経済大国、日本に発展しました。しかし、余りにも物の豊かさを追い求めたあまり、心で国を滅ぼしてしまうような昨今ではないかと思えます。

「物の豊かさから、心の豊かへ」と叫ばれて久しいわけですが、政治経済をはじめ、社会の様々な分野で問題点が露呈し又、犯罪も増々凶悪化、低年齢化し、安心して日常生活も送ることすら 危惧される状況です。

私達卒業生は、人になれ、奉仕せよ。の校訓をモットーに中学、高校時代を学びました。どんな時代に

あってもわずか八文字で人間の生き方、在り方を明確に表現した名文句です。今や日本は世界有数の少子、高齢化社会に突入し、今後増々学校経営、冬の到来といわれております。私達、卒業生にとって、母校の発展は共通の願いです。それにはまず、六葉会のメンバー一人一人が、街にいい人でありたいと思います。よく青少年の健全育成は家庭・学校・社会が一体となっていていかなければならないと言われております。

今、向こう三軒両隣り、袖すりあうも多少の縁、という言葉も消え失せたように思えます。私達卒業生は自分が生活する地域で、世の為人の為、様々なボランティア活動にも積極的に参加、推進すべきだと思います。その事が地域の活性化と母校の発展に寄与するものと確信致します。



学校の近況

校長

永野 肇

二十一世紀に向けて、急激な社会変化とともに学校教育が大きく変革されようとしています。少子化現象のますます進行する中、六浦中高、また関東学院全体に於いても、しっかりとした将来展望の確立が要求されております。

今この時代、キリスト教を土台とする関東学院の教育は、何をしなければならぬか、もう一度問い直すことが必要でしょう。そこには多くの課題が山積されていますが、積極的に取り組んで行きたいと考えております。

以上のような、私学にとって極めて厳しい現実があることを踏まえて、六浦中高の近況をお知らせいたします。

近況報告の前に、今年一月に逝去された村田汎愛先生について述べたいと思います。昨年十月入院直後に、病院にお見舞いに伺ったとき、先生

は私との短い会話のあと、同行した英語の教師と英語で会話を始めました。意識がかなり朦朧とした中にも、お元気な頃と変わらない、先生の凜とした姿に接し身がひきしまりました。関東学院のみならず、横浜のキリスト教主義学校との関わりを含め、先生のお働きに感謝申し上げ、心から哀悼の意を表したいと思えます。

さて、六浦中高の近況ですが、第一に、一七回生から続いておりまして高校入試を九十八年入試(九十八年二月実施)で打ち切ります。中高六年完全一貫教育に戻し、あらゆる面での教育内容の充実化を目指していく所存です。

第二に、一九六四年(昭和三十九年)に竣工された、三号館(二階建)の建て替え工事が進行中です。新校舎は、三階建、十五教室で教室を中心としており、一九九八年度の二学

期から使用の予定です。その他現在ある建物は、一九六七年(昭和四十二年)竣工の二号館(理科館)、一九七七年(昭和五十二年)竣工の本館・礼拝堂、そして比較的新しい四号館(特別教室棟)と一号館です。施設の面でもまだ十分とは言えませんが、時代の要求にあつた教育設備を整えることも、大きな課題として残されております。

第三に、現在の六浦中高教職員の構成ですが、専任教員六十名、専任職員六名、その他嘱託職員、非常勤講師、臨時職員などを合わせると約一〇〇名近くになります。その中で、特筆すべきことは、ここ数年間に十名余の教員が定年で退職されました。草創期の六浦中高を支え、発展させて下さった先生方です。その代わりに新しい教員が増えました。比較的最近の卒業生でも、来校された際、その様変わりよつにびっくりす

るのではないでしゅうか。

また、生徒数は中学生約六〇〇名、高校生約六〇〇名とほぼ同じ規模になっております。

最後に今年も、来年度へ向けての入試の準備に入りました。十月中には様々な方面への説明会もほぼ終り、その反応が気になっているところです。入試要項等は最後のページにありますので御覧いただければ幸いです。尚、ご質問等ございましたら、遠慮なく学校までお問い合わせ下さい。

以上近況を申し述べましたが、私学の存続は保護者のご理解とご協力、卒業生の励ましとご支援を抜きにして、考えることはできません。今後ともよろしくお願い申し上げます。

退任にあたり

石田 昭義



本年五月末日をもって任期満了により関東学院院長の職を退任し、また学院を退職することになった。私は退任・退職の挨拶を次のようにしたため、これまで私を指導してくださった方、私の教育の実践に協力・援助して支えてくださったり、種々の面において交わりを戴いた方々に書き送った。

『前略 一九五二年（昭和二十七年）より四十五年の間、関東学院において教育の業に携わり、学院に学んだ五年間を加えると、私の人生の

中の半世紀を過ごしたことになり、私の人生がここに位置づけられたということができません。 後略』

私にとってこの言葉は実感であった、ここに万感の思いを深く込めたのであった。

一九五二年は第二次世界大戦の敗北によって日本が、経済的に思想的に混乱していた時であり、国家に忠誠を尽くすことを終極の目的とした戦争中の学校教育を、個人の尊厳を柱とした民主主義の教育へと転換させた時代であった。

幼年期・少年期と国家思想に養わ

れた精神を、青年期に至って一挙に個を中心におき、その尊厳に立ち、権利と責任を重んじる民主主義は、私の自己の内面において変化させることは容易ではなかった。大学を卒業して母校の教壇に立ちながら、教育の果たす重さを自身の内的発達に鑑みて、その重さを感じつつ、関東学院がここに学ぶ若い魂をどのように養つことを目指した学校であるかを自問して、教壇の月日を重ねたのであった。

関東学院は、一九一九年（大正八年）坂田祐先生が初代代表として、創立にあたり教育の方針として掲げた「人になれ、奉仕せよ」を一貫し

て保持しているのである。

「人になる」とは人間としての心を持つことは、キリストの愛の教えを内面に備えることとし、そして自己を捨てて他者のために生きる実践行動を「奉仕せよ」としているのである。

この教育精神は時代の思潮や思想の嵐や権力の圧力にも臆することのない命題であって、創立以来今日に至るまで多くの共感、共鳴を得て多くの卒業生を輩出しているのはこの所以である。

私の教職生活の中にあつて、永く教頭・校長・院長という学校の管理や運営の立場にあつたが、私は絶えず一個人としての場を離れることな

く、人間の存在の意義は自己に与えられた使命を探りながら、その使命の遂行に全力を尽くすことこそ人間の在り方であるとの認識の実践に努めたのである。私の人生の半世紀を学院に過ごすことにより、「私の人生がここに位置づけられた」と書いたのは、この故である。

私は六葉会の卒業生諸君が、関東学院に学んだことによつて自己自身の人生において、なにを得、なにに促されて人生を歩む力としているかを自覚的に受け止め、それによつて社会に貢献する存在となることを願っている。

村田先生の想い出

6 回生 大井 人

村田汎愛先生について何か書くようにとのお話しをいただき、何を書いたらよいかで非常に迷ってしまいました。それは、村田先生は多くの卒業生の中に今も尚、深く心に刻まれた先生だからです。恐らく、関東学院六浦中学高等学校の創成期からの先生方はどなたも、大変ユニークな方々で甲乙つけがたいと思います

が、その中でもさらに一步上を行かれた感じがします。これは、もちろん生徒だけの間ではなく、先生方の間でも特別な方であったと思います。それは副校長という職域柄ではなく、その人柄そのものから来るものであったのではないのでしょうか。私は村田先生の御子様方と幼少より関東学院内にあった職員寮で共に

過ごさせていただいた関係で、ずいぶんとお世話になったと思います。

特に六浦中学入学後は、常に声を掛けて下さり、常に励ましの言葉をいただいたものでした。授業も受け持って下さり又クラス担任としてもお世話になりました。多くの卒業生が今も語るのですが、先生の英語の授業で多くの格言を教えていただいたことが今も心に残ると同時に、この年になっても忘れずに口をついて出てきます。当時先生は、皆に必ず格言ノートを作るようにおっしゃいました。大学ノートにほとんど格言がたまる程教えられ、常にそれを暗記して言われました。このノートは今ももう私の手元にはありませんが心の中に刻み込まれている私の宝だと思っています。そして、このノートの一ページにはまず、聖書の言葉が書かれていたことを憶えています。“Love your neighbor.”(汝の

隣人を愛せよ」と「Love your enemies」（汝の敵を愛せよ）をはじめとして、多くの聖句、格言、これらは、普通の授業の中でどんどん使われ、高校三年生の時にもずいぶんとあてられたことを昨日のように思い出します。教科書の文章の中に単語が出て来ると先生は必ず「はい、この単語の格言は」と質問されました。私など得意になって手を上げたことを憶えています。又英語の時間の前には必ず、全員でリーダーを読んでいないと先生の御機嫌が悪かったことを思い出します。休みの時間に数名の者が教員室を出られたかどうか偵察に行き、「来た！」という声と共に皆でリーダーを読み始めるといった有り様でした。又、当時、皆、いたずら盛りで、先生に怒られてばかりいたような気がします。先生は、怒られる時急に顔色を変えられ、こぶしで机をたたかれました。その恐

ろしいこと、一同、何も言えず、下を向くのみでした。そして、ひたすら「メンチャン台風」が通り過ぎるのを我慢していました。先生は又、クリスチャンとして、すばらしい方でした。私は真に隣人を思いやることを先生から知らされました。それは私自身についてのことですが、先生はある日進路指導のために私を教員室にお呼びになりました。「大井君はどこに行きたい」と先生の前に立つや否や聞かれました。私も受験勉強もしていないくせに偉らそうに「大学、英米文学科です」と言いました。その時、先生は唯一言だけ「大井はだめじゃ！」と言われました。私の進路指導はそれですべて終りでした。しかし、先生は言葉とは全く逆に私の家庭的なことを考えていて下さったのでした。受験をしても受からないからだめと言われたのではなく、母子家庭故、学費その

他が大変であるつとの深いご配慮であつたのです。もちろんその時は気づきませんでした。後にそのことを知った時、ほんとうに先生のやさしい心をいただいて、熱いものを感じました。現在私が伝道者として又母校の聖書科教師として働かせていただいているのも、先生のあの時の御指導がなければ無かつたのではないかと思ひ感謝の気持ちでいっぱいです。晩年の先生は六浦中高に月に何回かお見えになり、必ず、元気にやつているか否かをおたずねになり、お目が不自由にもかかわらず帰って行かれる姿を今でも思い出します。先生は天の国にお帰りになりましたが、多くの卒業生の心の中に常に生きていて力になって下さっているものと信じております。そして、もう、あのようなユニークな先生はおそらく今の学校では出てこないのではな

いかなどと思っております。

故村田汎愛先生年譜

明治三六年九月一日 横浜市戸部町字梅屋敷に生まれる
明治四四年 四月 新設の西前小学校に転入
同校在学中作家山本周五郎君（本
名清水三十六）らの友人を得る

大正 九年 春 内村鑑三先生の一文に感激、爾来、
無教会信者を自認

大正一三年 一月 病父を援けるとして進学を断念
し、外国商社に就職

夜間横浜市立商業学校の英語専攻
科に学ぶ

二か年の課程を修し、卒業と同時に
同校教授囑託となる

昭和 二年 四月 青山学院高等学部英文科入学
昭和 六年 三月 同校卒業、文部省より中等教員
（英語科）の免許証を受く

昭和 七年 四月 多田貞三先生の推薦により関東学
院英語科教員拝命

戦前、戦中、戦後にわたり勤務

中居 京牧師により洗礼を受け、
バプテスト教会に属して、現在に
及ぶ

平成九年一月二十五日 午後八時二十分、九十三才の天寿
を全うし、主の御許に召される



学年クラス会だより

還暦記念三暉会

この春、4月26日(土)、「還暦記念三暉会」を六浦キャンパスで開催した。

石田学院長、吉田先生、伊藤(旧姓)道子先生をはじめ恩師10名のこ

出席をいただき、90名近い懐かしい顔が揃い、和気あいあいの宴であった。

会場のおちらこちらに展開する談笑の渦。話題は中学・高校当時の木造で木の柱のある教室での出来事、鎌倉や三崎方面への木炭バスでの遠足、楽しかったフォークダンス等々の思い出から、お互いの現況に至るまでの百花(話)繚乱。卒業以来、会場で初めて顔を合わせた仲間も、終戦間もない中学・高校時代に共通の場で同じ体験を持った気安さから、40数年の空間が無かったかのごとく、ハダカになって話し合える素晴しさ。あっといふ間の時間がすぎ、記念写真を撮り、再会を約して一応閉会した。

その後は、姿が一変、立派になった母校の礼拝堂や校舎を見学し、名残りがつきない多くの仲間が二次会に集まり、想い出話しや、これから

のつき合いや遊びの相談をするなど、ここにおいても友誼の流れが、暖かく満ちていた。

三暉会

1、三暉会の「暉」は吉田祐暉彦先生(男子クラス担任)から一字いただき命名。

2、当初は、昭和30年に関東学院六浦高等学校を卒業した3期生約100名(男子1クラス、女子1クラス)で結成。

3、現在は、2、を中心に昭和24年に関東学院中学六浦教室に入學した新制中学3期生約160名(男子2クラス、女子1クラス)で構成。(昭和27年の高校進学時に男子35名前後と女子数名が三春台へ、20名前後が他校へ転出)

(還暦記念三暉会幹事記)

福田淳恵先生を囲む会

語学部OBによる

高校を卒業して、かれこれ二十五年の歳月が過ぎた。日常の多忙さに、当時の思い出はほこりをかぶって押入れの片隅にしまわれたままになっていた。今年三月、福田先生が退職されるといふ話を聞いた時、もうそんなに時が流れてしまったのかと驚かされたのが、正直な思いであった。いつも明るくエネルギーッシュであった、あの若々しいイメージと、退職という言葉が、私の頭の中では、どうしても、うまく結びついてゆかなかった。

私は、中高時代、語学部という部活に所属していた関係で、顧問をされていた福田先生には大変お世話に

なった。確かに運動部のような毎日の厳しい練習を通じての、監督と選手のような密な関係ではないが、文化祭の英語劇やスピーチコンテストというような行事を通じ、生意気でもがままな我々を、実に親身になって母性的な包容力で指導して下さった印象は、強く残っている。当時、若者が熱を上げた、プレスリーの映画、「エルピスオンステージ」に連れて行って下さったり、卒業時には、馬車道十番館で、食事を御馳走して下さったり、自宅につかかった時には、小さな英語の物語を皆に下さったり、決して一方的に押し付ける指導ではなく、我々の無鉄砲さの良い

方向へ導いていこうと努力されていたように思う。そのようなことも理解できずに、「若さ」というものは、たてをつく。英語の授業もおそわっていた私は、学生運動が盛りだったこともあって、「机の前で英語を勉強する以上に我々には話し合わなければならぬことがある」などと、授業中に、生意気な口を叩いた。夏休みに出された宿題は、長い休みには勉強以外の事で有意義に使いたいという屁理屈をこねて、白紙で提出した。今思うと顔から火が出る程、恥ずかしい。青春が美しいというのは、まさに”伝説”である。しかし、福田先生は、そんな”子供”のたわ

言を一つ一つ聞き入れて、無視したり、頭から否定したりすることをしなかった。

私は、正直なところ、「罪滅ぼし」という思いで、六月に、「退職された福田先生を囲む会」という小さな催しを企画した。福田先生は、「有難うと言わなければならぬのは私の方で、そのような会は、私の柄に合わない」と固辞されたが、何とか参加していただくことができた。語学部に籍を置いた卒業生に声を掛け、二十一回から四十四回までの三十数名のこぢんまりした暖かな会となった。当日は福田先生を中心に、高校時代の思い出話に花が咲いたのは言うまでもない。「先生、変わらないですね」「相変わらず、御若いですね」といっつのは、お世辞ではなく、生徒から見た教師の姿である。実際には、二十五年もの時が過ぎているはずなのに……。予定の時間は、あ



つという間に過ぎていった。この会のあいさつの中で、福田先生は教師になつたいきさつや、御家族のことなどを話され、最後に、これからの抱負として、英語の活動なども含め、ボランティアなどを通して、社会に少しでも役に立っていただきたい旨のことを話された。その姿は、まだまだ若々しく、もう後は、楽々と生活を

エンジョイしようというような甘えがなかった。何十年もの教師としての仕事を全うされ、もう終わったという感慨以上に、微力ながら、社会に貢献して生きていく中に喜びを見い出していこうとする真しな姿に強く胸を打たれたのは私だけではなかった。

私は、「罪滅ぼし」などというこつ慢な言葉を撤回せざるの思いを禁じ得ない。社会の中枢として深く考え、精力的な活動をしなければならぬはずの我々の方が、返って流され、甘えているのかもしれないと反省させられる思いがした。退職などは、仕事上の一つのくぎりに過ぎず、真念に貫かれた生き方が変わるわけではないのだ。四十を過ぎてても、教えられることの方が多く、なかなか師を超えることはできない。そんな思いを胸に、福田先生の笑顔と別れた一日であった。

(二十一回卒・近藤雅尚)

思い出

20回 板倉 由史子

急に担任が怒り出した。いつもは静かなホームルームなのに、今日は、担任の大きな声が響き渡る。

『誰だ。担任の名前をきちんと親に伝えてないのは！』

珍しいことである。めったに声を荒立てたりしない担任である。理由は、どうも、どこかの親が、生徒間で呼ばれていた「仇名」を、本名と思つて、電話をかけてきたらしい。

こんな記憶はもう一つある。その日も、担任は急に怒り出した。

『誰だ。こんなことをしたのは！』
教室のほとんどの者は、なんのことやら、良く分からない。後で聞くと、数人の男子の仕業だという。担任の言葉のままに、皆は一斉に天井を見上げた。ブロック校舎の天井には太

い梁が横に一本通っていた。見れば、その梁にナイフではつきりと、担任の「仇名」が掘ってあった。

「仇名」は周知の「サンペイ」である。緩やかにかかった髪のエエブからなのか、私たちの在学中は、生徒間では、その名で通っていた。

菊池光明先生のことである。

高校二、三年と担任をしていたいた。たくさん思い出がある。

生徒会から出された、議題は、ロング・ホームルームだけでは、話きれず、社会科の時間をずいぶんいただいた。その甲斐あってか、二組はいろいろなことを充分話しあえた。あまり数回にわたったので、さすがに、何度目かには先生も断られた。

また、あのころ、校庭で体操礼拝なるものがあった。その日はグラウンドシューズを履いてグラウンドに出なければならぬ。各クラスの担任から前日に伝えられるのが常だった

が、我が担任殿からは伝達はなかった。果たして、翌日、革靴でグラウンドに出て、クラス全員が体育科の先生方に怒られた。その後みんなは賢くなつて、隣のクラスから情報を得て、叱られることは、なくなった。

球技大会にはクラス全員のお揃いの帽子を作り、Tシャツを染め、旗をつくった。

私たちはよく話し合い、自分たちで考えた。クラスの中のさまざまなことを、自分たちの手で計画実行し、反省もし、学習もし、部活動もした。今思うと先生の大きな手の中で、学校での正式な遊び方を学んだ気がする。多感な時期に自分を見つめる姿勢を学んだ。自分を見つめ、自分を探し、自分と対峙した。聖書と讃美歌と関東六浦のゆっくりとした風の中で、そんな姿勢を学んだ気がする。やりたいことをやらせてもらいながら、自我や自覚や責任や義務、

失意や希望や団結や友情や…若い季節に知り得るすべてを身をもって知ることができた。

先生は、授業で「農民一揆」を真剣に語っていらした。「日本人は農民の歴史を知らなくてはならない」と、熱く語ってらした。自分の教える教科の中に先生自身の強いメッセージを感じた。続く不況、単調な経済と、平成とは名ばかりの現在、なぜか、先生のこの言葉を思い出す。

いま、周りを見ると、確かに優秀な大学を出られた先生が多い。しかし、よく見ると、依前『デモ、シカ教師』や、時間内だけ働く『役人教師』、自分自身のなんのメッセージももたない、ただ知識だけを伝える『教師マシンの』のような教師が多い。子供たちに何を求め、何を伝えたいのか。どんな世の中を創るとどんな人にしたいのか。また、子供たちに「自分とは何者か」を分からせよう



今年3月定年退職された菊池先生の若き姿

としているのか。教育とは何で、教師として何をしたいのか。なにも伝わってこない。教育の現場は、あまりの少子化で、手を出し過ぎて、生き方の方法までも教え、より合理的に、より効果的にと、促成栽培された、ある形だけが整った、一見美しいが、香りのない非力な子供たちをつくりあげている。そして、未来の大人予備軍たちは、中身は子供のままだ、内面も薄く、知識豊富に、自分の責任も、義務も、使命もなんのその、ただ大学に入り、就職をし、綺

麗な環境と人と同じなら安心な、綺麗な人生をもとめていく。

大学を出て、母校でしばらく教壇に立たせてもらったことがある。大学院生のにわか教師に何も指導などはできはしなかったが、成長する子供たちの側にいるのは、とてつもなく魅力的なことだった。その頃、先生に弓道を、そして同時に、集中すること、教えていただいた。

今年、母校で教壇に立たせてもらったから、二十一年目になる。子供達の魅力に魅せられたまま、いまだに、卒業出来ない生徒のように学校生活を続けている。自分も先生のように、子供たちへのしつかりとした、メッセージを持った教師に、なりたいたいと思っているのだが、難しい。たくさんのことを教わった、自分の人生の出発点はここにある。

先生に心からの感謝をこめて。

安曇野通信

曲淵 憲介

当地安曇野に移り住んで1年半、皆様にこの紙面でお目にかかってからはや1年、再び紅葉の季節が巡って参りました。前回は、当地に移り住んだ経緯や春から夏、初秋にかけての四季の移り変わりを書かせて頂きましたが、その後訪れた始めての冬から春にかけての様子をご紹介します。

9月上旬までは残暑で30を超え、日もありましたが、下旬になると朝晩の気温が10前後まで下がり暖房が必要な日もあります。この気温の落差には驚かされます。10月上旬になると、家から望める北アルプスの山々の岩肌が色づき始め、やがて前山が赤色や黄色に燃え、そして一

気に庭へと紅葉前線が駆け下って来ます。庭のクヌギやヤマウルシ等の木々は何となく生気を失い始め、緑色があせて来ます。こんな日々が2週間ほど続いたある朝、窓から差し込む光りがばかに明るいと感じ、外を見てびっくり、庭一面が赤色や黄色に染まっているではないですか。一夜にして別世界に変身、当然その日は初霜の日(10月17日)で、北アルプスの山々の頂きは紅葉から雪山の世界へと変わっていききました。昨年の紅葉は殊の外綺麗で、地元の人々もこんなに綺麗な紅葉は珍しいと言っていたくらいでした。また昨秋は、キノコが大豊作で、家の周りの林には朝早くからキノコ狩りをす

る人々で賑わいました。元々もキノコが専門であった私ですが、キノコの見分け方には自信がなく庭に生えたキノコを通りがかりの老人に教えてもらいながら恐る恐る2・3食してみました。その中の代表種はヌメリイグチやハナイグチで、別名リコボウとかジユコボウなどと言っているようです。

11月初めになると冷たい北風にあおられ凄まじい落葉の嵐に見舞われました。そんな落葉の中には、目の冷めるようなアントチアンによる赤



1996年10月下旬の我家の前田圃と北アルプス大天井岳 左奥と有明山(新濃富士) 右



1996.10下旬紅葉につつまれた我家

色のもの、キサントフィル等による黄色のものなどがあり、植物標本を作る要領で押し葉を楽しめます。葉の落ちたクヌギを見上げると、夏の間気がつかなかった小鳥の巢や、美しい黄緑色をした天蚕(ヤママユガ)のまゆが見つかります。天蚕は穂高町の特産品で、歩いて10分程の所に長野県の天柞蚕試験所があります。ながら閉鎖されてしまいました。その施設には付属の飼育所があって、食草であるクヌギを小ぶりに育て春から秋にかけては、ネットで一面に

覆って飼育していましたが今年ももう見ることが出来ませんでした。天蚕の糸で織った反物は、100万円単位の値段の付く高価なもののようにです。

この頃になると庭には、ジョウビタキやツグミなどの冬鳥達がやって来て、朝の気温も氷点下の日が多くなり本格的な冬を迎えます。車で20分程行った所を流れる犀川の遊水池には、コハクチョウやマガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、コガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ等の多くのカモ達が見られます。12月に入ると毎朝の気温が氷点下になり、山の雪が次第に下りて来て家の周りにもちらつき始めます。因みに昨年の初雪は11月16日でした。今日は海拔2000m位まで、今日は1000m位までと山を駆け下りて来る様は、木枯らしを予告してくれます。この月のある日、ガラス戸になにかぶつかる音がして

急いで外に出てみると、夏は比較的高い山で生活する雄のウソが横たわっていました。拾いあげて良く見ると、どうやら脳震盪により気絶しているようで、暫く暗い箱の中に入れて暖かい所に置き様子を見てみると、瞬きを繰り返しながら辺りをきよるきよると見回し始めました。箱から鳥を出しクヌギの枝にとまらせ写真を何枚か撮っているうちに、元気に飛び去っていきました。その数日後、庭に面した信濃路自然歩道のわきに見慣れない小鳥を窓越しに見つけ、良く見るとなんとミヤマホオジロでした。この鳥に初めて出会ったのは、理科の細井先生達と九州へバードウォッチングに出かけたときで、確か宮崎県と鹿児島県を結ぶ峠で一瞬見たのが初めてでした。それを居ながらにして観察できるとは思いませんでしたので、写真におさめることも忘れて見惚れ、気がついてカメラをと

りに行っている間に姿を消してしまいました。更にその数日後、居間の窓から百メートル程先にある大きな柿の木に、数10羽の小鳥の群れがとまったのを見て双眼鏡で確認すると、ヒレンジャクとキレンジャクの混群でした。決して珍しい鳥ではありませんが、今までに間近に見たことがなかったので急いで1000ミリの望遠レンズを持って近づいて見ましたが、残念ながら逆光のため写真は良く撮れませんでした。じっくりと観察できたのは幸いでした。

初めての正月を当地で迎えた1月、気温はぐんぐん下が朝の最低気温も氷点下5、10と下がり、23日にはついに氷点下15を記録しました。この日も約800メートル離れた新聞受けまで新聞をとりに行く途中、青空をバックにしたアカマツ林を見上げるとキラキラと光るものを見掛けました。何とこれはダイヤモンド

ンドダストでした。TV等で北海道のダイヤモンドダストは見たり聞いたりしたことはありましたが、この目で観察できた瞬間、手足の冷たさも忘れ暫し佇んで見惚れてしまいました。

このような厳しい寒さは2月いっぱい続き3月に入るとさすがに寒さもゆるみ庭の雪も上旬には全部溶け、田圃の畔も枯れ草色から次第に緑色に変わり、光りに春を感じるようになりましたが、朝晩は0前後とヒーターの火は絶やすことができません。その頃話題の今世紀最大輝



1997.4.10 7:50 pm
我家の前の水田より「ヘルボップ彗星」
左下の山は有明山

度の彗星「ヘルボップ彗星」が接近して来ました。天気の良い日には、午前4時半頃から北東の空に居間から観望できましたが、雑木林越しで条件がよくありませんでした。4月に入ると午後8時頃、北アルプスの上に大変良く観望でき写真に収めることもできました。そうこうするうちに桜は満開となり、田起こしが始まり田圃に水が張られるとどこで冬眠していたのかあの寒さが嘘のように、アマガエルが夏を待ちきれずに初鳴きしました。

このようにして当地での1年が経過しましたが、毎日が新鮮で飽きることもない四季の移り変わりが楽しめました。時の経つのが早く2年目に入っても思う存分楽しんでいきます。この春には、車で15分位の所に「安曇野ちひろ美術館」がオープンし山麓線の交通量も増えたようです。

(1997.10.4 記)

全日本学生選手権2連覇 世界に挑む卒業生

ボードセーリング

小菅寧子さん

（関東学院大学4年生
六浦中高41回卒）

六葉会の会員でこんなに素晴らしい活躍をしている人をご存知でしたか？
41回卒の小菅寧子さん（23歳）です。
全日本ボードセーリング（ウインドサーフィン）選手権を2連覇してい

ます。横須賀出身の彼女は一家でマリンスポーツを楽しむ家柄、兄の哲朗さんもヨットの選手。1メートル60、50kgと小柄ながらめきめき頭角を現しています。平成9年8月26日

付の読売新聞夕刊には全国版に大きく掲載されました。次の大会は11月にタイで開かれるアジアレガッタ。来年のアジア選手権、そして3年後のシドニー五輪での活躍が楽しみます。皆さんも是非彼女を応援してください。美人ですぞー。
（次号には特集を組む予定です。楽しみにして下さい。）

OB
訪問

ノザワ石油(株)

常務取締役

21回生 野沢博士さん



「中学時代、大西先生にお世話になったのをよく覚えています。運動ばかりやっていた。ひたすら青春の日々でしたね。」というバスケット部OBが21回卒業の野沢博士さん。現在は、ノザワ石油株式会社の常務取締役として活躍中。野沢昭良専務と奥様の育子さんも18回生という六葉会ファミリーです。

ノザワ石油は、三浦半島内8カ所にガソリンスタンドをもつ県内最大手の石油会社。この夏には、佐原インター店を新規開店しました。このガソリンスタンドはマクドナルドとの併設という新しい試みが注目を集め、テレビ東京で特集放映され、県内外からも多くの問い合わせがあり、対応に忙しくされています。注目を集めるだけに業績も右肩あがりとか。今、若い力とアイデアで事業の発展をめざすノザワ石油に期待が集まっています。

学校の牛乳屋さん

有限会社
武牛乳店
武 巖さん



牛乳屋のおじさんと武さんにお話をうかがいました。牛乳屋をはじめめて半世紀、関東学院ができたからずーっと牛乳をおさめています。



「あるとき、野球部の連中が店の前を通りかかってね。ちよとど、夕飯に焼き肉やって、肉食べてけよ！なんてね。学校の中だけじゃなく面

白かったな。いまじゃ、そいつらが子供つれて店へ来んだからいやなつちゃうよ。」「柑本先生が釣り好きでさ。こっちは船宿の売店もやってるもんだから釣り餌わけてもらってあげたりね。」「いろいろと学校の外でも関東をひいきにしてくれてます。話をうかがってみるとおじさんの娘さんは関東学院出身の9回生幹枝さんと15回生喜美子さん、それにおじさんの姪甥、総勢6人も関東学院出身だそうです。商売の方は、市大病院、八景駅、六浦駅そして他の学校や幼稚園におさめているということで大変忙しくされています。おまけに宅配の牛乳もこのところよくなってきた午前2時ころから500件をまわっているそうです。好きなお酒も晩酌でいどにがんばっている相変わらず元気なおじさんでした。

六葉会 1996 年度 決算報告書

収入の部

科 目	1996年度予算	1996年度決算	増 減	備 考
1995 年度分会費	2,400,000	2,493,600	93,600	
1996 年度分会費	2,800,000	2,887,200	87,200	
法人預け金 繰入	2,300,000	5,550,538	3,250,538	
入 会 金	452,000	444,000	8,000	@2,000 × 222 名
維 持 会 費	1,000,000	1,268,000	268,000	@4,000 × 317 名
卒業生の集い会費	300,000	0	300,000	会費未徴収の為
名簿定期預金繰入	3,400,000	3,400,000	0	名簿印刷代支払いの為
名簿広告代金	1,000,000	1,140,000	140,000	
名簿販売代金		192,500	192,500	@2,500 × 77 冊
受 取 り 利 息	10,000	13,461	3,461	
繰 収 入 金		35,000	35,000	卒業生・旧教員より寄付金
繰 越 金	660,617	660,617	0	
合 計	13,001,383	16,763,682	3,766,299	

支出の部

科 目	1996年度予算	1996年度決算	増 減	備 考
運 営 費				
会 議 費	400,000	358,106	41,894	
人 件 費	120,000	120,000	0	
事 務 費				
印 刷 費	200,000	50,400	149,600	名簿発行翌年のため
通 信 費	100,000	103,114	3,114	総会案内発送等
消 耗 品 費	10,000	288	9,712	
交 際 費				
慶 弔 費	100,000	70,620	29,380	
援 助 費	200,000	231,458	31,458	
合同同窓会分担金	67,800	67,800	0	
雑 費	10,000	4,025	5,975	振込手数料
事 業 費				
会 報 印 刷 費	1,000,000	1,599,553	599,553	
会 報 発 送 費	810,000	765,720	44,280	
名 簿 印 刷 費	4,532,000	4,532,000	0	
名 簿 発 送 費	200,000	250,672	50,672	44 回生発送分等
行 事 費	500,000	119,269	380,731	
生 徒 会 援 助 金	100,000	100,000	0	
積 立 金 繰 入 金				
一 般 積 立 金	1,500,000	0	1,500,000	
行 事 積 立 金	1,500,000	0	1,500,000	
名 簿 積 立 金	1,500,000	0	1,500,000	
在 校 生 会 費 預 け 金	0	9,208,800	9,208,800	
予 備 費	147,583	0	147,583	
小 計	12,997,383	17,581,825	4,584,442	
次 期 繰 越 金	0	818,143	818,143	
合 計	12,997,383	16,763,682	3,766,299	

六葉会1997年度 予算書

収入の部

科 目	1996年度予算	97年度科目	1997年度予算	増	減	備 考
1995年度分会費	2,400,000	45 回生分会費	2,844,000			
1996年度分会費	2,800,000	46 回生入会金	410,000			
法人預け金 繰入	2,300,000	法人預け金 繰入	2,820,800			
入 会 金	448,000					
維 持 会 費	1,000,000	維 持 会 費	1,000,000			
卒業生の集い会費	300,000	卒業生の集い会費	300,000			
名簿定期預金繰入	3,400,000	名簿販売代金	50,000			
名簿広告代金	1,000,000	名簿広告代金	60,000			
受 取 り 利 息	10,000	受 取 り 利 息	10,000			
繰 越 金	660,617	繰 越 金	818,143			
合 計	12,997,383		6,676,657	6,320,726		

支出の部

科 目	1996年度予算	1996年度予算	増	減	備 考
運 営 費					
会 議 費	400,000	350,000	50,000		
人 事 費	120,000		120,000		
印 刷 費	200,000	150,000	50,000		
通 信 費	100,000	150,000	50,000		
消 耗 品 費	10,000	30,000	20,000		
交 際 費					
慶 弔 費	100,000	100,000	0		
援 助 費	200,000	100,000	100,000		
合同同窓会分担金	67,800	66,600	1,200		
維 持 費	10,000	10,000	0		
事 業 費					
会 報 印 刷 費	1,000,000	1,000,000	0		
会 報 発 送 費	810,000	810,000	0		
名 簿 印 刷 費	4,532,000		4,532,000		
名 簿 発 送 費	200,000	6,800	193,200		
行 事 費	500,000	100,000	400,000		
生 徒 会 援 助 金	100,000	100,000	0		
積 立 金 繰 入					
一 般 積 立 金	1,500,000	100,000	1,400,000		
行 事 積 立 金	1,500,000	100,000	1,400,000		
名 簿 積 立 金	1,500,000	600,000	900,000		
在 校 生 会 費 預 り 金	0	2,820,800	2,820,800		
予 備 費	147,583	82,457	65,126		
合 計	12,997,383	6,676,657	6,320,726		

訃報 お悔やみ申し上げます(平成3年以降・会報編集委員会調査分)

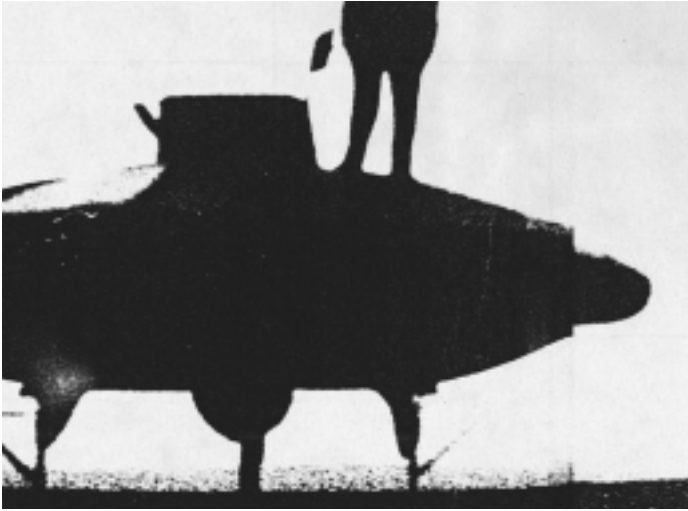
先生方

栗沢竹雄先生
村田汎愛先生
平成5年4月
9年1月

同窓

鈴木(菊池)節子 1回生1組 9年4月
森(小坂橋)純子 2回生1組 8年10月
中島 一 郎 2回生2組 5年1月
真野(稲川)マリ子 3回生1組 9年2月
小山(栗山)操 3回生1組 9年5月
芦沢 彰 夫 3回生2組 6年
岡田 弘 5回生2組 5年3月
渡辺 保 明 5回生3組 6年7月
福島 誠 治 6回生1組
安藤(太田)明美 6回生3組
秋葉 芳 樹 7回生3組 7年9月
瀬戸(榎田)広子 7回生2組 3年12月
鈴木(高沢)光江 7回生2組 4年7月
角田 昌 夫 7回生3組 7年9月
土部 信 行 7回生3組 9年5月
青木(鈴木)紀子 8回生1組 6年7月
広田 瑛 希 8回生3組 4年12月
石黒 正 仲 9回生1組 7年11月
中丸 一 治 9回生3組 5年1月
重森(小垣外)玉子 9回生3組 9年5月
宮井(山本)素子 9回生4組 7年8月
千賀 慶 太 郎 10回生2組 6年2月
相川 浩 明 10回生3組 8年8月
中村 仁 敬 10回生4組

伊藤 孝 邦 11回生4組 平成6年4月
伊藤 孝 12回生3組 6年1月
鈴木 雄 12回生4組 7年8月
田中 新 太 郎 13回生1組 6年9月
鶴若 讓 治 13回生3組 6年10月
皆川 孝 13回生4組 8年6月
小山内(八幡)重美 14回生1組 7年5月
兼重 公 信 14回生2組 4年7月
小野(田中)英子 14回生2組 9年
久保 田 英 子 14回生3組 8年5月
関 清 光 17回生3組 4年7月
高山 史 郎 17回生3組 9年1月
高木 敏 郎 19回生6組 8年9月
三壁 誠 一 郎 20回生3組 6年
水見 敦 子 21回生3組 4年
飯塚 孝 一 郎 22回生4組 8年2月
石川(山田)美也子 23回生2組 7年1月
鳥居 雅 彦 23回生3組 3年12月
長野 章 彦 23回生3組 3年
上野 弘 章 25回生3組 2年10月
織茂 彦 25回生3組 2年5月
長嶋 三 郎 27回生2組 9年1月
富田 明 彦 29回生2組 5年11月
山見 匡 彦 35回生4組 6年10月
北見 朋 信 37回生5組 3年11月
飯嶋 恵 美 子 38回生1組 6年10月
小林 恵 美 子 38回生4組 5年2月
小橋 圭 介 38回生5組 8年1月



ちよつと

COLUMN

少しUFOに興味のあるOBより

第二次世界大戦の最も大きな悲劇の一つは広島、長崎への原爆投下である。このころ、UFOが地球に頻繁に飛来したという。地球人が、「核」を手に入れたのは第二次世界大戦中、そして現実には核兵器が使われ、戦後は原爆よりさらに巨大な破壊力をもつ水爆が開発された。地下、地上を問わず核実験が行なわれ、その結果、地球の大気は放射能によって汚染される恐れも出てきた。

原子力による汚染の影響に晒されるのは、何も地球ばかりではない。地球の放射能汚染はやがて宇宙にも広がり、太陽系の惑星にも悪影響を及ぼすことになる。宇宙人はそれを未然に防ぐために、地球に飛来した

のだろう。しかし、宇宙人はやみくもに核エネルギーの使用を中止せよと言っただけではなく、UFOを始めとする彼らが、日常使っている宇宙空間に無尽蔵に存在する宇宙エネルギーの存在を教えその利用技術を開発するように勧めているのである。

現に、地球人の中にも、無限の宇宙エネルギーを利用して動くモーターや発電機を開発したり、開発しようとしている人は大勢いる。その中には、宇宙人から技術を教えてもらったケースもある。しかし、石油エネルギーや核エネルギーによって巨大な富を築いている、影の世界政府は、そうした人間が現われると、その技術が普及しないように力をつくづづしているのが現状なのである。

会報委員43期卒
前号の記事で、最初の文章の年号に誤りがありました。

誤1992年 正1929年。

編集後記

久し振りにお手伝い致しました。会報委員長の「若い力と感性」で一杯の当号をお届けします。皆様、ありがとうございます。 (22回卒 小泉孝一)

「若手主導で会報作成」という会報委員長の方針でスタートしましたが、やはり力及ばず、手取り足取り諸先輩方に助けていただきながら(ほとんどすべてレールを敷いていただいたような感じですが)、やっと発行できました。できてみるとうれしいものです。

取材に協力してくださった皆様に感謝しております。(33回卒 長浜龍太郎)

いかがでしたか。今までは少し違った内容になったと思います。前回から会報のイメージを変えようと思い、まわりの方々の御協力を得てこんな会報になりました。これからも会報の作成に力をそそぎ、皆様が必ず読んでいただける会報をつくり出していきたいと思います。御意見や御感想などがあつたら、御報告下さい。学校あてていいです。(43回卒 高石智一)

思い出の街角スナップ

昭和28年ごろの六浦橋付近



平成9年10月の六浦橋付近

1998年度(平成10年度) 中学校生徒募集要項

	〔1次〕	〔2次〕
募集人員	100名(男・女) いずれも本学院小学校からの進学者の数は含みません。	30名(男・女)
出願資格	1998年3月 小学校卒業見込みの者	
出願期間	1月9日(金)、10日(土)、12日(月) 受付時間 9:00～15:00	1月9日(金)、10日(土)、12日(月) 2月2日(月)～2月4日(水) 受付時間 9:00～15:00 ただし、2月4日(水)は9:00～12:00
出願書類	q 入学志願票・受験票(本校指定) w 志願者カード(本校指定) e 在学小学校6年生の成績通知表のコピー(B4サイズ)	
入学検定料	20,000円(銀行振り込み)	20,000円(銀行振り込み)
入学試験日	2月2日(月)	2月5日(木)
試験科目	国語・社会・理科・算数	国語・算数
合格発表	2月3日(火)10:00	2月5日(木)16:30

1998年度(平成10年度) 高等学校生徒募集要項

	〔一般入学試験〕
募集対象	外部受験クラス
募集人員	50名(男・女)
出願資格	中学卒業見込み又は卒業の者。 将来、外部大学または短大進学を第1志望とする者。
出願期間	1月26日(月)～1月27日(火) 受付時間 9:00～15:00
出願書類	q 入学志願票・受験票(本校指定) w 志願者カード(本校指定) e 在学中学校または卒業中学校の調査書
入学検定料	20,000円(銀行振り込み)
入学試験日	2月12日(木)
試験科目	国語・英語・数学・面接(本人のみ)
合格発表	2月13日(金)10:00



しまや
島谷

あきら
晃
(十回卒)

1943年7月1日 / 藤沢市に生まれる。

経 歴

1962年 / 関東学院六浦高等学校卒業(10回卒)

1967年 / 早稲田大学第一文学部文科美術学専修卒業

1976年 / 5月より1977年4月までオランダ・アムステルダム遊学


1988年 / 9月より1989年8月まで文化庁芸術家在外研修員
及び日米芸術家交換計画派遣芸術家としてアメリカ・ニューヨークにて研修

1990年 / 第6回カナダ青年画家シンポジウム'90に招待
(ケベックにて壁画製作)

1996年 / 鎌倉市岩瀬の西念寺、天井絵『鳳凰飛翔図』等3部作を完成

表紙のことば

35年前に卒業しました母校のイメージには
橄欖の葉と平和の使者の鳩が浮かんできます。
それをささえる年輩の我々は、実りつつある
人生の秋色の羽根をまとった鳩……。

校章の  橄欖の花もあしらってみました。

自分なりの静かなみのある時を、一日一日
過したいものだと思うこの頃です。

1997. 11. 1 発行

関東学院六葉会 〒236 横浜市金沢区六浦町4834(六浦中高等学校内) 1045(781)2525

印刷・(株)エイコープリント